

水稻の秋期管理情報第1号

(ニカメイガ、イネ白葉枯病、イネ縞葉枯病)

令和6年10月4日
愛知県農業総合試験場
環境基盤研究部病害虫防除室

水稻の収穫後は、速やかに刈り株をすき込みましょう！

水稻の収穫後には場の耕うんや畦畔雑草の除草を行い、病原菌の伝染源や害虫の越冬場所をなくすことで、次作での病害虫の発生量を減らすことにつながります。

1 ニカメイガ

9月下旬における巡回調査において、ニカメイガの被害株率は0.36%（平年0.49%、前年1.67%）と平年並でした。しかし、弥富市に設置した予察灯において、7月下旬から9月上旬にかけて成虫の誘殺が多い状況が続きました（図1）。

本種の幼虫はイネの茎の内部に食入し、茎を枯らします（心枯れ症状）。特に第2世代幼虫の被害が大きく、白穂や坪枯れ症状となることもあります（図2）。

本種は収穫後の刈り株や畦畔雑草で越冬するため、収穫後は速やかに刈り株をすき込み、ほ場周辺の除草を徹底しましょう。

2 イネ白葉枯病

本年のイネ白葉枯病の発生量は、平年並～やや少ない状況でした。

本病の病原菌は、被害わら、もみで越冬し、次作の伝染源となるため、発生が確認されたほ場では、秋期に稲わらをすき込み、腐熟させましょう。また、畦畔のイネ科雑草の除草を行いましょう。

3 イネ縞葉枯病

本年のイネ縞葉枯病の発生量は概ね平年並ですが、ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率が高い地域があったため、注意が必要です（表）。

本病は、ヒメトビウンカが媒介します。イネが本病に感染すると、葉先が「こより状」に垂れ下がり枯死します（ゆうれい症状）。また、穂が出すくんだり、不稔になったりすることにより減収します。

水稻の刈り株から発生したひこばえは、ヒメトビウンカの生息場所になることに加え、ヒメトビウンカが発病株のひこばえを吸汁して、イネ縞葉枯ウイルスを保毒することにつながります。収穫後、できるだけ早く耕うんするなど、ひこばえを放置しないようにしましょう。また、ヒメトビウンカは、畦畔等のイネ科雑草でも越冬するため、ほ場周辺や畦畔等の除草を徹底しましょう。

4 その他

ニカメイガ、イネ白葉枯病、イネ縞葉枯病が発生した地域では、次作における箱施薬を検討しましょう。

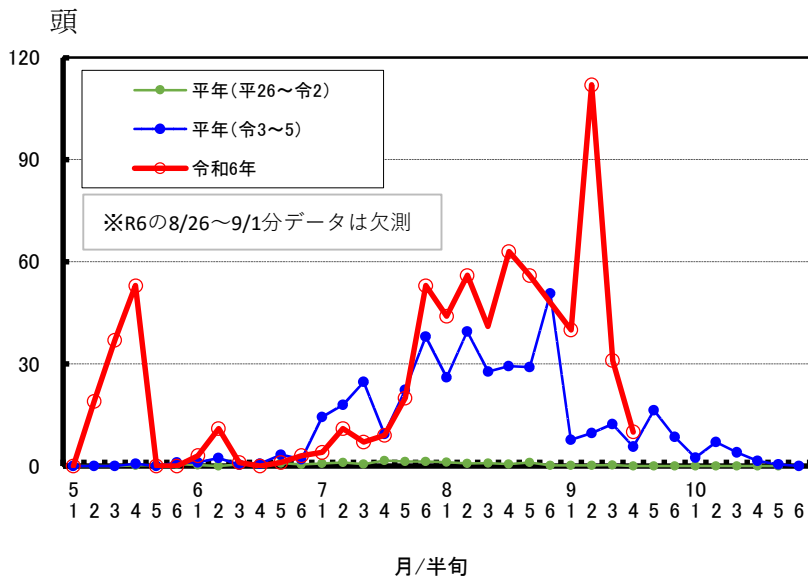


図1 弥富市の予察灯におけるニカメイガの誘殺状況



図2 ニカメイガ被害株

表 ヒメトビウンカの縞葉枯ウイルス保毒虫率
(令和6年5月～6月に採取、簡易ELISA法により検定)

調査地点	検定虫数 (頭)	保毒虫数 (頭)	保毒虫率 (%)
弥富市 鍋田町	12	0	0.0
飛島村 新政成	10	0	0.0
長久手市 農総試内	16	0	0.0
豊田市 田代町	17	0	0.0
前林町	30	0	0.0
中町	19	0	0.0
和会町	45	1	2.2
福受町	22	0	0.0
刈谷市 小垣江町	27	0	0.0
安城市 里町	36	0	0.0
赤松町	45	1	2.2
榎前町	12	0	0.0
高棚町	10	0	0.0
寺領町	30	0	0.0
岡崎市 在家町	28	0	0.0
碧南市 縄手町	12	1	8.3
西尾市 小栗町	35	1	2.9
一色町養ヶ島	11	0	0.0
吉良町吉田	16	0	0.0
小焼野町	22	3	13.6
和気町	19	0	0.0
豊川市 御津町広石	13	0	0.0
計	487	7	1.44